

Contents

うしくサイエンスフェスタ 2009 への
ブース出展「化石の粘土模型（クレイモデル）
をつくろう」

「産総研キャラバン2009はままつ」に
【移動地質標本館】を出展しました

日本ジオパーク記念式典

地質調査総合センター第13回シンポジウム
「海域・沿岸域の資源・環境・防災
—持続的発展に向けた海洋地質研究—」開催

CCOP DelSEA-II プロジェクト
「東南アジアと東アジアのデルタにおける
統合的地質アセスメント—第2期—」の
キックオフ会合が韓国で開催される

地質地盤情報協議会
平成20年度第2回運営委員会・同総会、及び
第6回意見交換会の報告

第14回産総研サイエンスカフェ「地下で働く
いきものたち」参加報告

スケジュール

編集後記

うしくサイエンスフェスタ 2009 へのブース出展 「化石の粘土模型（クレイモデル）をつくろう」

澤田 結基・宮内 渉・兼子 沙知（地質標本館）・
利光 誠一・兼子 尚知・宮地 良典（地質情報研究部門）

2009年2月14日(土)、「うしくサイエンスフェスタ2009」が茨城県牛久市中央生涯学習センターで開催されました。このイベントは牛久市教育委員会と地域の関係機関が協力して開催する科学イベントで、科学技術振興機構（JST）の「理数大好きモデル地域事業」の一環として行われています。季節はずれのぽかぽか陽気となった当日は、親子連れを中心に830人の入場者で賑わいました。産総研からは6名が展示・解説のために参加しました。

イベントは、19種類の科学実験や体験コーナーを集めた「サイエンス・ラボ」と、標語コンテストの表彰式や小中学校によるジオトープ学習などの報告会を行う「カップ大交流会」に分かれています。また、理数大好きモデル地域事業の最終年度となる今年のイベントでは、教育実践プログラムの成果発表会も同時に開催されました。

地質標本館では、サイエンス・ラボへ「化石の粘土模型（クレイモデル）をつくろう」というブースを出展しました。この企画の特徴は、鋳型に実物の印象化石を使うことにあります。化石を含むノジュールを割ると、片方に化石の本体、もう片方には化石の型がついた窪み（印象化石）が現れます。この印象化石に樹脂粘土を押し入れると、粘土模型（凸型）を作成できます。なお地質標本館では、2007年の参加以降、ヒマラヤ山脈から産出したアンモナイトの化石を使用しています。

来場者には、まずノジュールに入った化石本体とその印象化石をよく観察しても

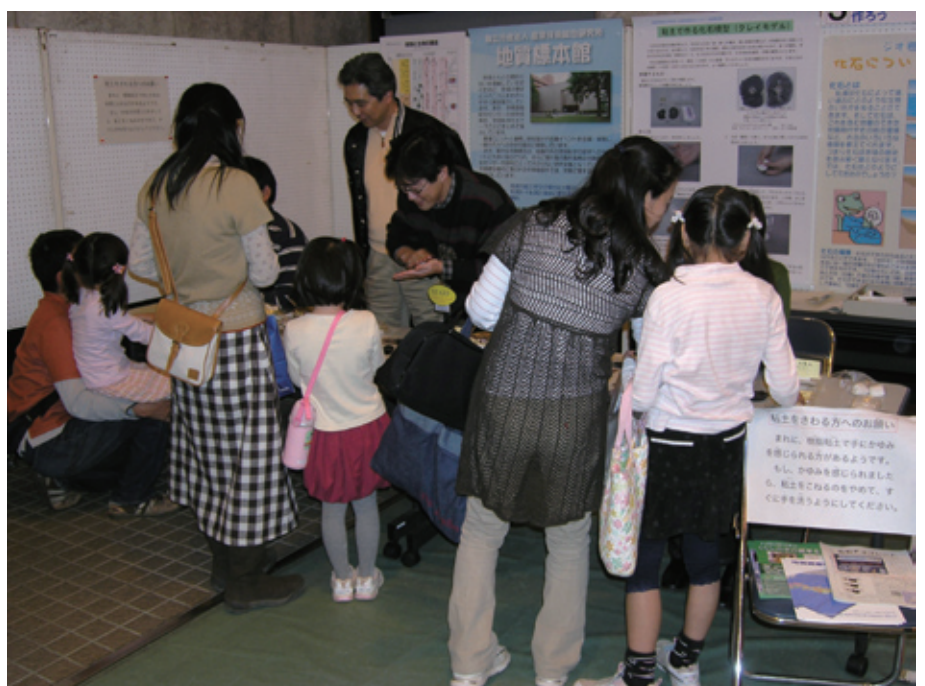


写真 会場の様子。



らい、アンモナイトについて解説してから作業に入りました。手順は次の通りです。まず樹脂粘土をよくこねて団子をつくり、それを印象化石のなかに押し当てて親指で押しつけます。次に、型に入れた粘土の反対側をプラスチックパック（スーパーのお総菜などに使う透明な容器）のふたに置き、そのままテーブルに押しつけて平らにします。最後に、粘土を型からゆっくりとはがし、できた模型の保護のためプラスチックケースにふたをして完成です。樹脂粘土の硬化には1週間ほどかかるので、ケースのまま静かに持ち帰っていただきました。

13:30の開始から終了時間の16:00までに約100名の参加があり、ブースは常に賑わっていました。スタッフ不足

で順番待ちの整理が追いつかなかった過去の反省から、今回は列の整理や待ち時間のご案内を行いました。そのおかげか、人の入れ替わりがとてもスムーズで、トラブルなく進みました。

参加者の多くは小学生以下の子どもでしたが、なかには中学生や大人の方もいました。また、開催日がバレンタインデーであったためか、チョコレートをつくるための化石の鋳型がつかれないか尋ねられることがありました。GSJ監修の化石チョコレートをご案内しましたが、今後は食品にも使える化石の鋳型を作るイベントがあってもよいかもしれません。

「産総研キャラバン2009はままつ」に【移動地質標本館】を出展しました

吉田 朋弘（地質標本館）

2009年2月14日（土）～15日（日）に、静岡県浜松市の浜松科学館にて開催された産総研キャラバンに移動地質標本館を出展しました。

広報部（展示業務室）主催の産総研キャラバンは、地域博物館の会場を借りて、体験をとおして産総研の成果を紹介するイベントです。出雲科学館（島根）、科学技術館（東京）に続き3回目になります。

キャラバンのメインは、ヒューマノイドロボット「HRP-2」で、システムエラーを起こした回もありましたが、5回の実演では毎回満席で私の感覚では、過去最高の賑わいを見せていたように思います。

「移動地質標本館」は、標本館紹介コーナー（ポスター・標本展示）、地形の立体視コーナー（プリズムメガネで見る「日本」・「本州中央部」、赤青メガネで見る「静岡および周辺」）、体験コーナー「飛び出す火山を作ろう」を出展しました（写真1）。

出展スペースが想像より狭く、またロボット見学者が多かったこともあり、混雑により来場者にはご迷惑をかけたてしまいましたが、「飛び出す火山」のコーナーは過去最高の製作個数を記録しました。コーナーは一人に対応するため、毎回10人程度の規模で行いますが、1日に約7～80個作成が平均でした。今回は、14日（土）に119個、15日（日）に144個でした。後日、浜松市立東部中学の先生から連絡があり、授業で使いたいとのことで7組送付しました。中学校のブログ（<http://weblog.city.hamamatsu-szo.ed.jp/tobu-j/>）でも紹介してくれました。

3月7～8日には、福井県児童科学館（坂井市）で4

回目の産総研キャラバンが開催され、移動地質標本館を出展しました。福井では新たな体験コーナーが…。次号の報告を楽しみにしてください。

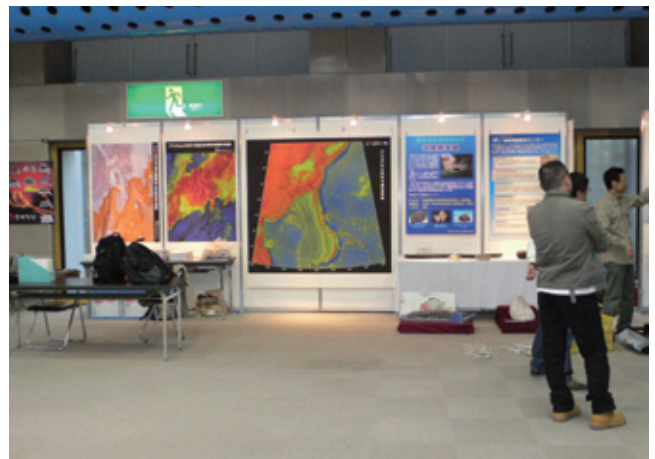


写真1 「移動地質標本館」展示。



写真2 「飛び出す火山」コーナー。

日本ジオパーク記念式典

渡辺 真人（地質調査情報センター，地質情報研究部門）

2月20日に日本ジオパーク委員会（JGC）が主催する日本ジオパーク記念式典が東京大学小柴ホールにて開催されました。昨年大きく進歩した日本のジオパークの活動を世間にお披露目する式典でした。

はじめに、来賓の日本ツーリズム産業団体連合会会長でJTB相談役の船山龍二氏からご挨拶を頂きました。船山氏は雲仙普賢岳の噴火の際のJTBの九州管轄の責任者で、噴火の影響がない地域でも観光客が減少するのを見て、火山の専門家の力を借りて安全情報を提供し、ゴーストタウン化した観光地に支援ツアーを企画したそうです。ジオパークには業界としても深く強く関わりたい、と発言されました。また、高橋はるみ北海道知事、ユネスコ自然科学局からも日本のジオパーク活動に期待するメッセージが届きました。

次に、昨年12月20日に日本ジオパーク委員会が認定した日本ジオパーク7地域に、尾池JGC委員長から認定証が授与されました。記念写真を撮った後、日本ジオパーク連絡協議会会長である糸魚川市の米田市長から、「日本ジオパークネットワークを設立して、情報を発信し、ジオパークの拡大に努め、日本独自で特徴のある世界に通用するジオパークを誕生させることを宣言します。」という力強い設立宣言がなされました。続いて行われた尾池委員長の基調講演では、ジオパークとはどのようなものかという紹介とともに、変動帯の地質・地形と、動く大地に住む人の暮らしを世界の人に安全に見てもらえるようにと日本のジオパークへの期待が語られました。

休憩をはさんで、7つのジオパークを紹介する講演が、各地の代表からありました。プロである学芸員の方だけでなく、「地球科学をかじりはじめたばかりの地方政治家の話を聞いて頂きたい」と話を始められた中貝豊岡市長をはじめ、教育委員会、自治体の人や県議会議員と、専門家でない方々が、10分という限られた時間の中で、見事に各ジオパークの面白さを伝えてくださいました。専門家だけでなく、地

元の人が自ら地元のジオを語る、というジオパークの理念が実現しつつあります。ロビーには各地域のジオパークを紹介するポスターやパンフレット類が展示され、式典の開始前、休憩時間に熱心な意見交換が行われていました。

若い人と女性が少なかったのがやや残念でしたが、本式典に参加してくださった方には、ジオパークに関わる人たちの熱い思いが伝わったことと思います。この輪がどんどん大きくなるよう、皆様のご支援とご協力をお願いします。



写真1 北但大震災と城崎温泉の復興について語る中貝豊岡市長。

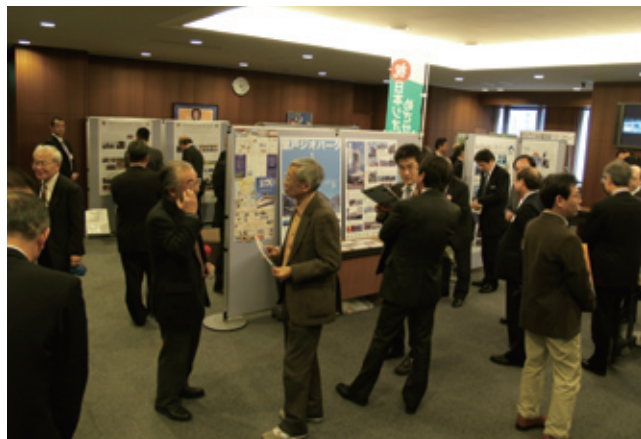


写真2 ポスター会場の様子。

地質調査総合センター第13回シンポジウム「海域・沿岸域の資源・環境・防災 —持続的発展に向けた海洋地質研究—」開催

西村 昭（地質情報研究部門）

標記のシンポジウムは、2月26日（木）13:00より、秋葉原ダイビルコンベンションホールで開催され、約180名もの参加者があった。本シンポジウムは、海洋基本法の制定や能登半島地震・新潟県中越沖地震など沿岸域での被害地震の発生、資源高騰から海洋資源への注目と

いった海域の地質情報の整備の必要性が認識される中で、産総研での調査研究の紹介と今後を考える機会にと企画し開催となったものである。

全体は3部の構成で、「資源」「環境」「基盤研究・防災」をキーワードとした7つの講演が行われた（写真1）。

「資源」では、(独)石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)の神田慶太氏に海底資源をめぐる情勢についての講演をして頂いた。海洋基本法の制定以降の状況や海洋エネルギー・鉱物資源開発計画の紹介も含め、JOGMECでの海域の石油・ガス・水素などのエネルギー資源、ならびに鉱物資源の調査の現状と課題検討などを詳細に紹介された。資源開発は経済状況に大きな影響を受けるため、昨年からは国際的に海底鉱物資源開発への機運はやや停滞気味である。しかし、日本はほとんどのエネルギー・鉱物資源を海外依存している。海域の資源量の把握や開発への技術力の担保は、日本の将来に必要な不可欠であることを強調されたことが印象的であった。次に、地質情報研究部門の飯笹幸吉氏が、海底熱水鉱床の調査データに基づく最新の日本の海底熱水鉱床の実態の紹介、地圏資源環境研究部門の棚橋 学氏が海域のエネルギー資源の調査と開発の現状と将来の方向性の紹介をした。

「環境」では、地質情報研究部門の斎藤文紀氏より、人間活動による河川流量や土砂供給量の変化がアジアのメガデルタに与える影響についての研究、地質情報研究部門の鈴木 淳氏より、サンゴ礁研究による人間活動の地球環境に与える影響の詳細な精度での復元や評価についての講演があった。「基盤情報・防災」では、東京大学海洋研究所の徳山英一氏から、海洋地質の現状と課題として、多機能(海洋)地質図をキーワードとして、産総研の海洋地質調査研究への期待と叱咤激励を頂いた。データ取得や解析技術も進む中で、地質情報を整備する必要性、三次元データの取得やそれを表現する海洋地質データの整備と成果の普及まで多岐な内容であった。そして、活断層研究センターの岡村行信氏が、海洋地質情報の整備と海洋地質図の出版、それらの調査研究から海域での地震発生を考える基本的なテクトニクス理解に至ったこと、今年度から開始した沿岸地域地質・活断層調査の紹介を行った。

最後の総合討論は、産総研による海洋地質研究の将来への提言や意見を多くの方から頂く時間がなかった。海洋基本計画での海洋情報の一元化を進めている内閣府総合海洋政策本部の谷伸参事官から、社会へ貢献する情報をいつま

でにどれだけの精度での整備が必要かを明確に説明することが、国民からの理解と政策としてのバックアップも得られるという重要な指摘があり、海域地質情報整備の今後への大きな示唆を与えられた。産総研の海洋地質研究は、日本周辺海域での海洋地質図で代表される地質情報の体系的な整備と、表題でもある資源・環境・防災といった社会的な課題に応える調査研究を両輪として進めている。今回のシンポジウムは原点に戻っての課題を考える機会になったと考えている。

今回のポスター発表は、本シンポジウムへ自発的に行って頂いた(写真2)。37件もの発表があり、産総研の多様な調査・研究・技術開発を紹介宣伝いただけたのはシンポジウムの世話人として、うれしい限りであった。同会場では海洋地質図の展示や地質図の販売も行われた。



写真1 講演会の様子。

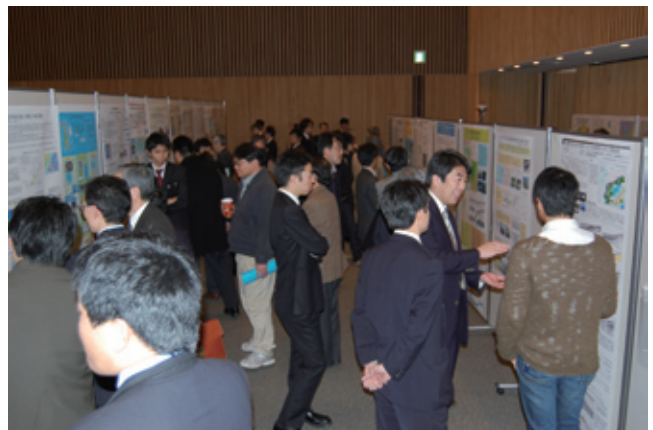


写真2 ポスター会場の様子。

CCOP DeISEA-II プロジェクト「東南アジアと東アジアのデルタにおける統合的地質アセスメントー第2期」のキックオフ会合が韓国で開催される

斎藤 文紀 (地質情報研究部門)

GSJ/AIST が主導する CCOP プロジェクトの「東南アジアと東アジアのデルタにおける統合的地質アセスメント(Integrated Geological Assessment for Deltas in Southeast

and East Asia (DeISEA))」が 2007 年に終了し、2008 年から同プロジェクトの第2期が開始され、キックオフ会合が韓国テジョンにおいて 2009 年 3 月 3～5 日に開

催された (CCOP-KIGAM-GSJ/AIST DelSEA-II Workshop on Geological Studies for Coastal Areas, Onshore and Offshore: New Approaches and Concepts. Dates: 3-5 March 2009, Venue: KIGAM, Daejeon, Korea).

アジアの沿岸域を特徴付けるデルタは、大陸の大河川のみならず、島嶼国においても重要な役割を担っている。多くの大都市が位置し、居住、工業立地、農業・水産業など、人口増加と経済成長に伴い、ますますデルタ沿岸域の保全と持続的な成長が求められている。DelSEA プロジェクトでは、地質学的な観点や手法によってデルタの環境を捉えることにより、環境評価や開発、保全対策に貢献することを目指している。特に、各国のデルタで起こっている様々な問題、行っている調査や対策などの情報や知識を共有し、また幅広い基礎的な知識や最先端の技術を習得するために、ほぼ毎年ワークショップを行ってきた。また、各国からの要望に応える形で、個別のセミナー、ショートコース等も実施してきている。

DelSEA-Iの活動

2004年度から2007年度の4年間にDelSEA-Iにおいて行ってきた活動は以下の通りである。

年会のワークショップ

- (1) 第2回国際デルタ会議に合同参加。ベトナム(ホーチミン)、2005年1月10～16日、22ヶ国から103名。
- (2) 第3回国際デルタ会議に合同参加。ブルネイ、2006年1月13～18日、17ヶ国から約80名。
- (3) 「東南アジアと東アジアのデルタにおける沿岸侵食と地質アセスメント」に関するワークショップの開催。2007年5月24～25日、タイ(バンコク)、9ヶ国から15名が参加。
- (4) 「東南アジアと東アジアのデルタにおける沿岸侵食と地質アセスメント」に関するワークショップの開催。2007年12月4～6日、インドネシア(バンドン)、8ヶ国から40名が参加。

セミナーとショートコース

- (1) デルタセミナー。2005年9月23～24日、韓国テジョンの韓国地質資源研究所、参加者約30名。
- (2) マレーシアのデルタの研究に関するセミナー。2006年3月14日、マレーシア、クアラルンプールの鉱物地球科学局、参加者約35名。3月15～16日は巡検。
- (3) デルタに関する特別セミナー:沿岸システムにおける堆積プロセスからシーケンス。2006年5月24～26日、中国青島のXindong Hotel、中国地質調査局青島海洋地質研究所がホスト、参加者約100名。
- (4) 沿岸堆積学セミナー:デルタ、海水準変動、津波。

2006年7月25日、インドネシア、バンドンの地質調査センター、参加者約100名。

- (5) デルタの発達とデルタの危機に関する公開デルタセミナー。2007年7月5日、ベトナム、ハノイのベトナム科学技術院海洋地質地球物理研究所、参加者約80名。
- #### フィールドトレーニング

- (1) カンボジアのメコン河音波探査調査。カンボジア鉱物資源総局と合同、2006年4月20～29日(3ヶ国)。

DelSEA-IIの活動

2008年度から4年計画で始まったDelSEA-IIにおいてもDelSEA-Iと同じく年会のワークショップ、参加国からの要望に応える形でセミナーやショートコースを計画している。

第1回の年会

2009年3月3～5日韓国のテジョンの韓国地質資源研究所(KIGAM)において、第1回のワークショップであるキックオフ会合が開催された。参加者は9ヶ国から約35名で、日本からの参加者は上原克人さん(九州大学)、田中明子さん(地質情報研究部門)とプロジェクトリーダー



写真1. ゴムソー海岸におけるDelSEA-II記念撮影。



写真2. ゴムソー海岸で説明をする全南大学のSeung-Soo CHUN教授。

の筆者で、韓国と日本を除く各国の参加者は、インドネシア（1名）、マレーシア（1名）、タイ（3名、内CCOP事務局から2名）、ベトナム（1名）、カンボジア（1名）、フィリピン（1名）、中国（2名）であった。

今回の会合では、キックオフ会合ということもあり、海洋物理や人口衛星データ、アジアのデルタの現況などの基礎的な事柄に関する基調講演が最初に設けられ、更にホストである韓国地質資源研究所のSeong-Pil KIM氏の努力によって、3月3日のワークショップで3件、4日の夕方に巡検宿泊先のホテルで4件の発表が韓国を代表する研究者により行われ、韓国の沿岸域の堆積環境や現在行われている調査内容を知る良い機会となった。

巡検では、韓国西南部のドンホー海浜、ゴムソー潮汐低地、2006年に世界最長の33kmの防潮堤がつながったセマンガム干潟地域を見学した（写真1,2）。農地として計画されたセマンガムの干潟埋め立て計画は、2008年に工業用地

や自然環境区などの複合利用に変更され、計画が進められている。堤防の外側と内側双方で環境調査が行われているが、周辺海域を含めて海洋堆積環境は激変したようである。
次回以降の会合

DelSEA-IIの第2回会合は、2009年秋に中国の天津で開催する方向で検討が行われている。またセミナーやショートコースについては、インドネシアとタイから第四紀地質や沿岸地質に関して行ってほしいという要望が出されている。

謝辞：テジョンでの会合では、韓国地質資源研究所の国際室のYoung Ju LEE室長、石油地質資源部のSeong-Pil KIM氏、同研究所のスタッフ、巡検では全南大学(Chonnam National University)のSeung-Soo CHUN教授をはじめ多くの方々にお世話になった。家庭的な雰囲気の下で活発な議論が行われ、非常に有意義な会合であった。記してこれらの方々にお礼申し上げる。

地質地盤情報協議会平成20年度第2回運営委員会・同総会、及び第6回意見交換会の報告

下川 浩一（地質調査情報センター）

3月4日（水）経済産業省別館10階会議室において、地質地盤情報協議会の平成20年度第2回運営委員会、同総会と第6回意見交換会が開催されました。

地質地盤情報協議会は、地質地盤情報の重要性や施策に関して横断的・双方向的に議論できる場を提供し、地質分野における産学官連携活動を強化・推進することを目的に、産総研コンソーシアムの一つとして平成18年4月17日に設立されたもので、本協議会会長である地質情報研究部門の栗本史雄部門長を中心に、年2回の総会と複数回の運営委員会、及び意見交換会を開催してきました。

午前中に開かれた平成20年度第2回運営委員会では、総会の進め方と平成21年度事業計画について事務局より説明があり、来年度も引き続き、意見交換会等を通じて地質地盤情報の重要性を訴えていくということで了解が得られました。また、地圏資源環境研究部門の佐脇貴幸氏を新しく運営委員に加えることが承認され、さらに、協議会の活動をわかりやすく示すキャッチフレーズの案を事務局より提案することになりました。最後に、イノベーション推進室の森本慎一郎氏より、イノベーション・オンラインの説明がありました。

午後から開かれた平成20年度第2回総会では、東京都土木技術センターの松村真人運営委員が議長に選出され、出席者21名、委任状24通で定数に達していることが宣言

されました。議事では、平成20年度事業報告と平成21年度事業計画が栗本会長より説明され、承認されました。また、事務局より、暫定版の平成20年度会計報告と新運営委員の紹介、及び産総研イノベーション・オンラインの概要説明と協議会としての参加提案がなされ、承認されました。

総会終了後、午後2時より同じ会場で、本協議会第6回意見交換会が開かれました。本意見交換会には、地質地盤情報協議会の会員に加え、講演者の方や省庁関係者など、全部で60名の参加者があり、ほぼ満席の状況でした（写真）。

最初に、栗本会長から、本協議会のミッションと社会的効果は、重要性の認識向上、高精度化と利便性向上、及びビジ



写真 第6回意見交換会の様子。

ネスモデルの提案であり、今回の意見交換会もそのような目的に沿って行うという、開催の趣旨説明がありました。

講演では、まず、国土交通省大臣官房技術調査課の溝口宏樹氏により、平成20年3月28日に開設された国土地盤情報検索サイト（KuniJiban）について、詳細な紹介がありました。次に、神奈川県都市整備技術センターの吉村弘樹氏により、神奈川県における地質地盤情報の公開についての紹介の後、中国地質調査業協会岡山支部の木村隆行氏により、岡山県地盤図の紹介があり、各地域で地質地盤情報の公開が進んでいることが実感されました。また、本年3月2日に設立された(株)ジオネット・オンラインの亀和田俊一氏・釘持一郎氏による講演では、公開されている地質地盤情報を活用した新しいビジネスの創出について紹介があり、ビジネスモデルとして注目すべき内容でした。温泉及び深井戸ボーリングデータの公開については、(財)中央温泉研究所の甘露寺泰雄氏に紹介していただき、独自の事情として利用権に関する課題があることが指摘されました。次の地圏資源環境研究部門の佐脇貴幸氏による講演「南関東ガス田研究にとっての地質地盤情報の重要性」でも、公開について同様の事情があるようです。最後に、内閣府防災担当の佐藤 豊氏による講演「防災に役立つボーリングデータ」があり、大規模地震による地震動予測のためにはボーリングデータの収集作業が非常に重要であるとの指摘がありました。また、各講演の後には、参加者による熱

心な質問及び意見交換がありました。

講演後の意見交換・議論では、まず、データの公開について、3次元地質構造モデルやS波速度構造などの地下構造データは各機関で公開ないし公開準備を行っているとのことでした。次に、ボーリングデータの公開と個人情報との関係については、民法では「私権は公共の福祉に従う」とあるので、ボーリングデータの公共性を社会に強く訴えるべきだ、という意見や、ボーリングデータは安心・安全に関わるデータとして、たとえ私権であっても公開すべき、という意見がありました。ただし、ボーリングデータを含む地質地盤情報が、どのように安心・安全な暮らしに役立つかをもっと一般市民にわかるように示す努力も続けていく必要があるとの意見もありました。さらに、法整備については、まずは既存の法律でどこまで対応できるかを見極めることが必要で、新たな法律を作るのには相当な社会的コンセンサスが必要であるとの意見を踏まえ、栗本会長より、法整備については別組織を作って検討していくとの表明がありました。

最後に、本協議会副会長の岩松 暉氏によるとりまとめと閉会の挨拶をもって、本意見交換会は盛会のうちに終了しました。

なお、本会終了後、地下1階の食堂で懇親会が開かれ、31名の参加者により遅くまで活発な意見交換が行われました。

第14回産総研サイエンスカフェ「地下で働くいきものたち」参加報告

町田 功（地圏資源環境研究部門）

2009年3月6日（金）午後6:30から8:00まで、つくばカピオ別館「カフェベルガ」にて、産総研サイエンスカフェが開催された。産総研サイエンスカフェの開催は今回で14回目を数え、地質分野からは4回目となる。サイエンスカフェは、専門家の話題提供を通じて、コーヒーなどを飲みながらおしゃべりを楽しみ、科学や研究活動、研究者に親しみを持ってもらうことを目的としている。

今回は、地圏資源環境研究部門の竹内美緒氏に地下圏微生物に関する三部構成の話題を提供していただいた。第一部は、地下圏のいきものである微生物の大きさや形状、種類、生息圏などの基本的な事柄についての紹介である（写真1）。特に微生物のサイズ（マイクロスケール）は一般の方にはピンとこない部分であるが、実に分かりやすく説明されていた。例えば、アリと微生物の大きさの比較や、微生物と（微生物が存在する）地層間隙の大きさを、人間と家の大きさに例えるとどのようになるか？といった内容

である。このように、微生物を人間に置き換えて考えてみることで、参加者は微生物をより身近に感じることができたのではないだろうか。説明の後はシャール内にて実際に培養している微生物の姿を見ていただくと共に、お土



写真1

産用に顕微鏡でみたときの微生物の写真を配布した。第二部は、地下圏で微生物が生息するための様々な仕組みの話や、研究風景や研究方法についての紹介であった。地下圏微生物が有機物に依存せずに生きており、生命の起源とも関連するという話や、世代時間（寿命のようなもの）が何千年にもなるかもしれない、という話に多くの方が驚いた様子であった。第二部の終わりの休憩時間では現地調査用の複数の採水装置に触れていただくと共に、ボーリングコアの観察や成型を実際に体験していただくコーナーを設けたところ、大変好評であった。第三部では生活に役立つ微生物にスポットライトが当てられた。特に地下水汚染物質である有機塩素系化合物を分解する微生物や、地下に埋蔵されている二酸化炭素と水素からメタンを生成する微生物には多くの方が興味をもたれたようである。

今回のサイエンスカフェは大変に盛況であったと思う。まず事前参加登録希望者が非常に多く、地下圏微生物への一般の方の関心の高さが伺えた（当日参加者数 25 名）。会場に用意された各テーブルでは、1 名ずつ地質調査総合センターの研究者（石井武政、坂田 将、鈴木庸平、持丸華子、吉岡秀佳、および筆者）が座って質問を受け付ける



写真2

とともに、最近の科学に関する紹介などもおこなったが、いずれのテーブルでも活発な話し合いが行われた（写真2）。参加者の科学に対する興味は高く、私の担当したテーブルでも高度な質問が飛び交ったため、とうとう竹内氏にヘルプを求めてしまった。講演が終了した後も、閉店のアナウンス（午後 8:30）があるまで全てのテーブルで質問が止むことがなく、大部分の方が席を立たずに各テーブルの研究者との会話を楽しんでいただけたようだった。

編集後記

植木 岳雪
（地質調査情報センター）

10 月より地質情報研究部門から地質調査情報センターに移動した植木です。今回、初めてニュースレターを担当しました。締め切りがあるこまごまとしたことに日々対応しているうちに、あっという間に半年がたっしてしまいましたが、最近ようやく情報センターの仕事にも慣れてきました。研究部門にいたときは関東平野の 5 万分の 1 地質図幅の調査・研究をしていて、毎年冬はフィールドで最も忙しい時期なのですが、今は全く野外に行くことがなくなり、寂しい気がします。しかし、悲しいかな、花粉症に悩まされていることだけは同じです。

私は地質情報展、国際惑星地球年 (IYPE) 日本、GSJ シンポジウム、GSJ ニュースレターなどの広報活動を担当していますので、研究者の皆様方には原稿執筆、展示・解説などさまざまなお願いをしまいがちですが、どうぞ宜しく願いいたします。来年度、皆様方がより活躍することをお祈りして、私も後方支援部隊としてがんばります。

スケジュール

4月14日～7月6日

地質標本館春の特別展「五百澤智也 山のスケッチとフィールドノート」（地質標本館）
http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2009/fieldnote/fieldnote.html

【関連イベント】

4月19日：特別講演会「地質探偵ハラヤマと探る槍穂高連峰の生い立ち」（産総研・共用講堂）

5月10日：特別講演会「氷河の痕跡を探せ！ ー北アルプスの氷河地形調査ー」（地質標本館映像室）

5月10日

地質の日 <http://www.gsj.jp/geologyday/>

5月16～21日

日本地球惑星科学連合大会（幕張メッセ）
<http://www.jpogu.org/meeting/index.htm>

6月3日

地質地盤情報協議会 平成21年度第1回総会及び意見交換会（経済産業省別館10階）

6月15日

第14回GSJシンポジウム「地質リスク（仮称）」（東京大学 小柴ホール）

GSJ Newsletter No.54 2009/3

発行日：2009 年 3 月 25 日

発行：独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター

編集：独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査情報センター

協田 浩二（編集長）

植木 岳雪（編集担当）

志摩 あかね（デザイン・レイアウト）

GSJ ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

■地質調査総合センターホームページ：<http://www.gsj.jp/>

■GSJ Newsletter のページ：<http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

〒305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第 7
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672